



海、その望ましき

未来は来るか？

宇田道隆

沖縄海洋博のテーマみたいだが、「海」は「生み」に通ずる、生命（人間を含めて）の地球上に始まる「ふるさと」で、また現在から未来にかけての最大の生命、生産の拠りどころとなる世界でもあって、私どもは今一度海への認識を新たにすべきである。海は海塩（うみしお）の莫大量を含む塩

水の集まりだ。塩は昔から人間の生活必需品で月給代りに支払われ、サラリ一の語源をなしているが、未来の有用な潜在資源でもある。ほう大な海水からこれをとり出すといっしょに、人間の生活に欠くことのできない水資源も得られる。

又海は莫大な太陽エネルギーの貯蔵庫でもあり、その恵みが光合成作用を通じて植物、動物を生み、魚、貝、藻、海獣など有用な生物資源を驚嘆すべき多様で微妙なバランスのとれた網目模様の連関を通じた生態系として存在する。貝も古代人には今の金銭宝物の代用をなしていたことは財貨の文字に貝のはいっていることでもわかる。魚はサカナ＝酒菜で、主食の小麦、芋などの炭水化物にそえての蛋白質副食品で、肉食には欠かせないものである。

近代になって石炭石油の田が海底にみつかって開発され、ダイヤモンド、砂金、砂鉄や、近ごろでは深海底のマンガン塊やリン鉱塊も採取されだしている。まことに豊富なエネルギー源、生産物質源を内蔵する海というべきである。

さらに重い大量の物資を運ぶ便のある海、激増する人類の未来の居住行楽地帯や、物資の集積貯蔵倉庫や、空港、工場等の海上と海中に建設し収容する海洋空間の占居利用も予想され、すでにある程度行われつつある。人間活動のため必要なエネルギー資源も海洋に豊富にあり、しかも環境汚染を起さない波浪、潮汐、海潮流、水中温度差、海面の太陽熱、風力、さらに進んで海洋中の大量の水の中の水素成分、重水素などが目をつけられている。

人口を無制限にふやせばあと数十年後に地球破滅になることは明白で、今の勢いでは物資消費で底をつき、しかも廃棄物に悩まされて息の塞まるような世界になる。もう地球上の物資とエネルギーの利用可能な総量が有限である以上は、それに見合う人口も限定せざるを得ない。廿世紀（あと廿年余り）の中に態勢をととのえることができなければ廿一世紀には人類が生残れない深刻な事態になった。鉱物資源は掘れば消尽し、間もなく行きつまる。再利用のできる循環行程を深刻な意味で案出しなければならぬ。これに対して海洋生物資源は更新可能で、卵から稚魚、幼魚、成魚となり、又産卵して世代をくり返し、条件さえよければ増殖する利子つきの株かぶのようなものであるから、フィッシュ・ストックとい

い、利子の分の範囲で収穫しているなら元株は減らないから永久的に続いて行けるといのが水産生物の資源論で、獲り過ぎにならぬように最大持続生産量を科学的にはじき出すのがサケ、マス、カニでもマグロでも国際的な大仕事になっている。栽培漁業という種苗から育てて大きくして収穫する事業が急速に伸びたが、畑の荒廃が問題で、ここに大きな悩みがある。これは海洋汚染である。獲り過ぎ以上に今深刻な問題になって来ている。問題は「タレ流し」、「海洋投棄」、煙突等からの大気拡散を通じての落下にあり、事情は過去の物量が少く人工毒物のなかつたときと一変した。栽培漁業の夢も昨夏の内海のハマチ千六百万尾斃死の例でみるように惨めに破られている。PCB、水銀等々遺伝子も

変える凄しさで生物濃縮が進み、シラスウナギも降海の稚鮭も亡ぼされ、魚貝は油臭を帯び、今に食うものもなくなる有様である。列島改造論も地価値上りや、これまで流儀の人の頭では汚染処理などゴマカシで、全国に四日市、川崎、鹿島等の再現から日本列島破滅に終る心配が濃い。

（東海大学教授・日本海洋学会長）

焼物のみどころ

中 川 千 咲

一口にやきものといっても、磨き上げたような美しさの中国のやきものから、日本のやきものに多い、素朴で味わいの深いものなどいろいろあって、